本市の学力の状況について

【問合先】＝本庁学校教育課指導グループ
TEL（23）5111（内線5341）

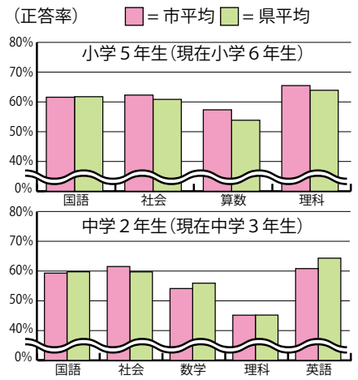
児童生徒の学力の状況を、今年行われた3つの学力調査から、小学6年生・中学3年生の結果をお知らせします。

①鹿児島学習定着度調査（H27・1）

右のグラフは、今年1月、小学5年生、中学1・2年生を対象に行われた、鹿児島学習定着度調査の結果です。

小学5年生（現在小学6年生）では、国語が県平均と同程度で、他の3教科（社会・算数・理科）は、県平均を上回る結果となっています。

一方、中学2年生（現在中学3年生）では、社会科が県平均を上回っているものの、それ以外の4教科では、県平均をやや下回る結果となっています。



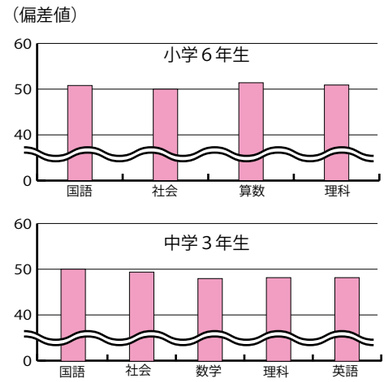
②標準学力検査（H27・4）

右のグラフは、4月に実施した標準学力検査の結果です。

標準学力検査は、小学1年生を除く全ての児童生徒を対象に行われており、学力の水準を全国標準と比較して分析することができます。（縦軸は学力偏差値で、全国平均は50となります。）

小学6年生では、4教科全てにおいて全国平均偏差値50を上回っており、①の調査結果と同様、概ね満足できる学力を示しています。さらに、社会以外は前回より伸びが見られました。

一方、中学3年生では、全ての教科において、わずかに全国平均偏差値に達していません。特に、数学においては課題が残る結果となっています。



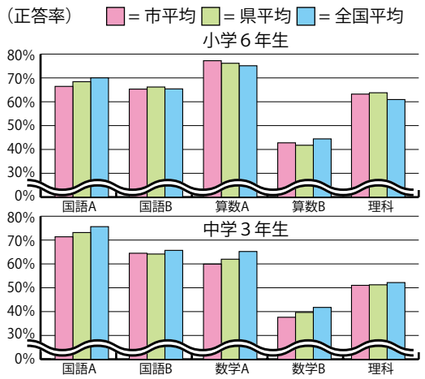
③全国学力・学習状況調査（H27・4）

右のグラフは、4月に実施された全国学力・学習状況調査の結果です。

全国学力・学習状況調査は、小学6年生と中学3年生が対象で、国語・算数（数学）・理科の3教科が実施されました。うち、国語と算数（数学）は、A問題（主として知識）とB問題（主として活用）に分けて分析することができます。

小学6年生では、算数Aにおいて県や全国平均を上回っており、理科においても全国平均を上回っています。国語B、算数Bは、全国平均を下回っているものの、差は縮小傾向にあります。

一方、中学3年生においては、国語Bと理科はわずかな差ではありますが、全国平均を下回っています。



薩摩川内市 本物の授業を創る 10 の提言（概要）

1. どんな力をつけさせたいのか、何をどのように学ばせるのか、目標を明確にした授業を行う。
2. 子どもが学びたいと思うような魅力ある「学習問題やめあて」を子どもと創る。
3. 子どもが「分かった。できた。」と思える授業を創る。
4. 子どもが思い切り活動する授業を創る。
5. 自分の思いを伝え、友達を認め、共に磨き、高め合う授業を創る。
6. 子どもが「がんばった。工夫した。発見した。」と言える授業を創る。
7. ペアやグループ活動を生かして、全員が発表できる授業を行う。
8. 教師が教卓から離れて、子どもの近くに寄り添い、子どもの様子や思いを感じ取ることを大切にした授業を行う。
9. めあてとまとめをつなげて、分かったことや学んだことを振り返る授業を行う。
10. 授業を終えたら板書を教室の後ろから見て、自分の指導を振り返る。

これらを総合的に分析すると、基礎的・基本的な内容の知識や理解度（A問題）は概ね定着しているものの、学んだことを生活や日常の場面に活用・応用する力（B問題）が小・中学校ともに課題が残った形です。

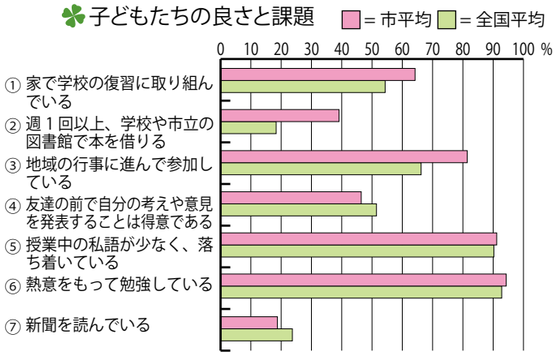
これを踏まえ、各学校では思考力、判断力、表現力などをさらに高めていくために、次のような授業の改善に取り組んでいます。

質問紙などから見える子どもたちの良さと課題

全国学習・学力状況調査では、質問紙による調査も行いました。

これは、子どもたちの学習意欲、学習方法、学習環境、生活の状況などに関する意識を調査したものです。

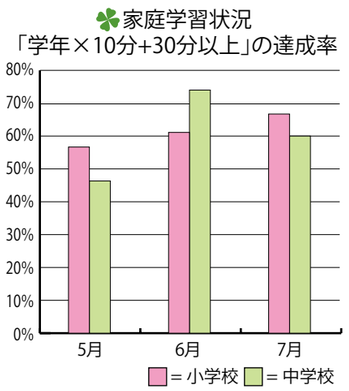
左のグラフは、全国と比較した、本市の子どもたちの状況についてまとめたものです。



これを見ると、家庭では復習を中心とした学習傾向が強く、学校や図書館を上手に活用して本を読んでいることが分かります。また、地域の行事に進んで参加している割合も高くなっています。学校における授業態度についても、私語が少なく落ち着いており、熱意を持って学習に取り組んでいるという高い評価がされています。

一方、友達の前で自分の考えや意見を述べることには、苦手意識があるようです。多くの情報を読み取り、自分の考えをまとめる力が、より要求されます。

教育委員会では、社会の出来事に興味・関心を持ってもらうよう、全小中学校に新聞を購入し、各学校の新聞コーナーなどの充実を図っています。与えられた知識だけでなく、自ら問題を提起し、解決していく力の習得が望まれます。



右のグラフは、本市が調査している「家庭学習状況」の結果です。

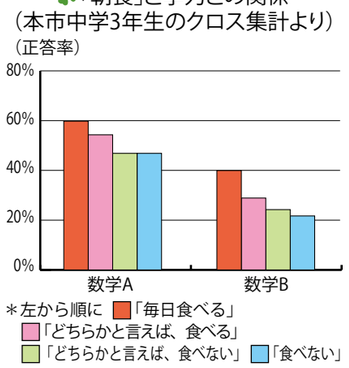
学校では、「学年×10分＋30分以上」の家庭学習時間を確保するよう指導していますが、目標水準（小学生90％・中学生80％）には達していません。

各家庭において、「学年×10分＋30分以上」の家庭学習が習慣になるよう、子どもへの声かけや励ましをお願いします。

「朝食」「携帯・スマホ」と学力との関係

全国学力・学習状況調査の結果分析では、「クロス集計」も行われました。

クロス集計とは、学力（平均正答率）と、児童生徒の学校や家庭での生活習慣・学習環境などの回答内容とを重ねて分析したものです。



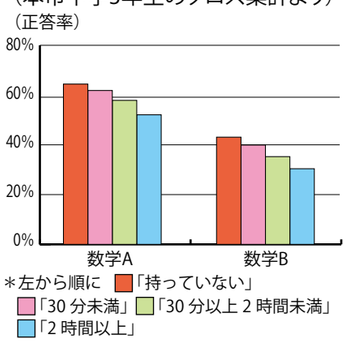
●朝食と学力との関係

「朝食を毎日食べる習慣のある生徒が、学力が高い傾向にある」ということが分かります。「午前中のパワーと集中力は朝食から」といわれます。朝の生活リズムを整え、朝食で脳を活性化させることが、学力向上にもつながります。

●携帯・スマホと学力との関係

携帯やスマホの「一日当たりの使用時間」が、学力との関係に影響を及ぼしていることが懸念されています。

本市においても全国と同様、一日当たりの使用時間が長くなればなるほど、正答率が下がる傾向が見られます。ひいては、睡眠不足による生活の乱れ、集中力や学習意欲の低下、ネットいじめや友人関係のトラブルに発展する危険性もあります。フィルタリング（有害アクセス制限）の設定や家庭内でのルール作り、日頃からの親子・家族間のコミュニケーションを通して、子どもの生活環境や学習環境を整えていく取り組みが望まれます。



本市には、豊かな自然や景観、歴史・文化の教育的資源がたくさんあります。それらを活用しながら、教育活動のさらなる充実に努めます。

今後も、地域の方々や保護者の皆さまと連携しながら、子どもたちの夢を大切に育みたいですね。